平成２８年度第６回「知事と一緒に生き活きトーク」の発言要旨

１　テーマ：子ども達が落ち着いて学習できる環境の整備に向けて
２　日　時：平成２８年８月２９日（月）
３　場　所：おかやま西川原プラザ
４　参加者：児童生徒の問題行動や不登校等の課題に取り組んでいる教職員、県下の学校で児童生徒への支援活動等を行っている集中指導員やスクールソーシャルワーカー等の方々　８名
５　知事挨拶

どのように学校を運営して、落ち着いた学習環境をつくっていくかということに関して、それぞれの立場で活躍されている皆様に、自分の仕事やプログラムではこういうところが良くなったとか、今でもこういう問題がある、こういうことをすべきではないかなど、皆様が思われることや、私が知っておくべきだなと皆様が思うことについてお話しを伺いたい。

６　発言内容等

・３年ほど前から荒れている状況があったが、生徒指導体制等を整備し、少しずつ良くなっている。警察やスクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー等と連携しながら、少しずつ取組を進めて行きたいと考えている。
・外部機関とのつながりは、数年前にはうまく連携がとれなかった部分が、ここ最近はスムーズに連携がとれるようになってきており、プラスになっているという気がする。
・今年度、学級崩壊等早期対応事業を活用しており、今まで授業に入れなかった生徒がこの事業のおかげで楽しみに学校に来るような事例もある。非常にありがたいと思っている。
・登校支援員を配置していただき、一緒に生徒の支援をしている。支援員のおかげで、保健室登校の児童に関し、登校する時間が少しずつ早くなってきている。授業があると、保健室に入れない時間もあったが、支援員がきたことにより、安定して落ちついて、対応できるようになってきている。
・不登校傾向の生徒の自宅等へ行事等の関係で伺えない日には、支援員が物を届けたり、顔を見に行ってくれるおかげで、保護者の方も情緒的に安定し、非常にありがたいと思っている。すぐに解決するような問題ではないが、少しずついい方向に向かっている。
・スクールソーシャルワーカーというのは、まだまだ啓発が進んでおらず、知らないという学校がたくさんあると思う。当初は３人ぐらいのスクールソーシャルワーカーから始まったが、現在は２９名が全県で活動している。ケースに応じて私たちが出向いていく、アウトリーチという訪問型の支援をさせていただいている。私たちは教育者ではなく、ましてや医療での治療者でも、指導者でもない。子供たちと一緒に考えて、一緒に悩む、一緒に汗をかくということをとても大切にしている。子供の視点に立って、そこからの課題を解決していく。解決するのは我々ではなく、子ども自身だったり、そのご家族が向き合っていくところをサポートさせてもらっている。もちろんソーシャルワーカーだけでできる

ことじゃなくて、学校の先生方とか、関係機関との連携が大切だ。
・ケースによってスクールソーシャルワーカーに家庭とつないでもらったり、非行傾向であれば、警察に直接その生徒に社会のルールはこうなっている、という注意をしていただく。第三者の方に支援してもらうことは、大きな力になるので、うまくコーディネートできるとチーム学校として連携がとれていくと思っている。
・本校では、ここ数年、問題行動自体が大幅に減ってきている。授業エスケープも数年前はたくさんいたが、ほぼない状況にはなっている。ただ、今度は、教室にはいるけれども、いろんなことが気になるという生徒がいることが課題だと感じている。
・昔は、学校が単体として地域の核となっていたが、今の時代、学校の力だけでは核にならなくなってきていると思う。地域の核に学校がなるためにも、地域の力が要る。地域の方が先生として入られる地域支援事業や、学校の生活指導なども地域の方の力をお借りしている。外部の力が入ってこようとしたときに、教員で何とかしようという意識が邪魔をしてうまくいかなかったり、活用しきれない場面がこれまで多かったと思う。コーディネーターの存在は地域など、外部の力を入れていく上で非常に有効だと思う。
・小学校で不登校や課題を抱えている子供たちのことについて、やはり学校では担任がすごく責任を感じる。いかに担任のせいだけにせずに学校全体で支援を入れて、みんなで支えていくということが大切だと思っている。不登校傾向のある子や支援が必要な子について、月に１回、全員で支援状況などを話し合う会を持っており、一人の担任が抱え込むことのないようにしている。校内だけでは限界があるので、どのように外部に支援を求めていくかということは課題だと思っている。
・短いサイクルで不登校や支援の必要な状態から脱却できる生徒はいいが、長期になった場合の学習支援や、保護者をどう支えていくかということは、非常に問題を抱えているのが現状だ。今年度は、登校支援員を活用しており、明かりは見えてきているかなと校内で話している。こういう支援をしていただけるのは、本当にありがたいと感じている。
・担任だけではなく、みんなで支えるという話がでたが、不登校問題、あるいは学級崩壊の問題にしても、学校を訪問していて一番感じる、改善してきている学校の共通点の一つがそれだ。チームで支えあえている学校は改善している。
・スクールソーシャルワーカーによって違うと思うが、私の場合は１年で大体７万キロぐらい車で移動する。各圏域にお邪魔して、学校だけでなく、関係機関や医療機関にも行く。スクールソーシャルワーカーは、岡山県は派遣型だが、全国では決して派遣が全てではない。拠点校型として、ある中学校を拠点校としてＳＳＷが常駐し、その区域の学校を見ているところもある。あるケースを最初から最後までコーディネートしていくという形が今後でてくるのではないかと思っている。
・学校自身もどういう課題があって何が必要なのか、どういう人に支援をお願いするかということを把握して、なぜ必要なのかということをアピールしていかないと、支援してくれる方を生かせないのが一番もったいないと思うので、そこは押さえないといけないと思う。
・スクールソーシャルワーカーはケースに合わせて人が来てくれる。家庭に入ったり、病

院に行くところまで支援してくれる。学校警察連絡室の方も、言い方は悪いが、警察へのハードルがとても低くなった。「困っているんだけど」と相談したら、それは犯罪にかかわることなので厳しく注意しましょうとか、ここはちょっと学校で頑張りましょうというアドバイスをいただける。教員が言っても聞かないことを、側面から厳しく家族の方に甘いですよと言ってくれる、本当にありがたいと思っている。
・別室指導対応などもあり、教員の人数が足りないというのは感じている。スクールソーシャルワーカーや警察など機能を持った方がどういうことをしてくれるのかということを子供に一番近い担任の先生方に、我々が紹介していかないといけない。紹介をしていくことによって、担任の先生方の負担というのも少しでも減っていくのではないかと思う。
・学校現場は、若い教員が多い。特にここ最近は新採用の先生が増え、年上の保護者が相手になるので、言いにくい部分やうまく対応ができないということがある。そういった時にスクールソーシャルワーカーがパイプ役になっていただいたりすることを考えると、そういう機能を持っている方に来ていただくと助かる。その反面、学校で実際に子供たちとかかわっていくのは教員なので、教員の人数も必要だ。どちらを増やす方がいいかということはなかなか判断ができないが、ケース・バイ・ケースなのかなと考えている。
・本校は、いろんな人が外から学校に入っている。大学生のボランティアがインターンシップで来てくれ、毎日、３、４人が授業のサポートをしてくれている。もちろん地域の人も来てくれる。人がいるということが学校の力になることは間違いない。そこに人材、人の数をかけるというのは絶対必要なことだと思う。例えばアンケートの集計などサポートをしてくれる教師業務アシスタントも本校に配置してもらっており、全校生徒アンケートも集計ができて非常にありがたい。こちらの負担が軽減されているのは事実だ。人がいるということは、それだけ大きな力になるが、ただいるだけじゃなく、やはり機能を持つというところが一番大事と思う。
・若い大学生だと勢いというか、若いというだけで子供たちが懐いていくので、話相手にもなり、十分その機能を果たしていると思うし、逆に退職された校長先生だと、指導や注意は現役がするが、大きい広い心でこうやればといった対応してくださり、それはそれで、子供たちも安心する。教師だけではなく、機能を持った方を配置していただくというのは非常にありがたいと思う。
・小学校は学級担任なので、例えば、クラスを飛び出した子の相手をする人が職員室を見渡してみてもいない。授業に行ってない者が手分けをしてあたっているが、人がいないので人が欲しいというのは事実だ。若い人が新採用で入ってきているが、３０代、４０代の教員がいない状態なので、校長ＯＢの集中指導員は子供への対応の仕方が慣れていて、うまく対応してくださるのでありがたい。地域の方も入ってくれて、ふだんの教科の授業にも、地域の人が入ってきてくれる。何か起きた時に校長ＯＢの方が居ると助かるし、地域の人が入ってくださることで、事が起こる前の段階、子どもの心の成長にもなるし、地域の人の楽しみでもあるようだ。
・専門性で言うのであれば、スクールカウンセラーに入っていただいているのが非常にありがたい。当校でも若い教員がどんどん増えており、保護者の相談や対応という部分でも、

教員にはない観点で保護者の相談に乗ってくれ、相談を受けたお子さんに関しては、クラスを回って授業の様子の観察や、休み時間に一緒に遊んでくださり、人間関係の持ち方などもよく見て、次の相談につなげてくれる。いただいた人材をいかに有効に活用しながら、教員がどのようにやっていくかが本校では課題と認識している。学校の中だけでは難しい問題に外部の方を活用していくというのは大切なことだと考えている。
・地域との連携というと、いつも学校のほうに来ていただく、協力していただくというイメージばかりがある。そうではなくて、地域へ学校が飛び出していって、お祭りに参加する、何か地域へ出かけていく、それが非常に大切だと思う。
・中学校は勉強しに来てくださいといったら皆尻込みをされる。公民館で中学生が小学生に教える勉強教室や、逆に公民館の大人が中学校の部活を指導に行くなどの活動を積極的にしているが、そういう公民館の活動が子供たちとつながっていくと地域の活性化になるのでもっとしてほしいという声をたくさんいただいている。
・不登校の子どもたちにしても、あるいは非行等に走る子供たちにしても、今まで大切にされているとか認められているという体験が少ないのではないかという気がする。自分のことを見てくれている、心配してくれている人がいるということを実感できる、そのことを実感できるのは、小学校の時代に、それがたとえ不登校の改善というのにすぐにつながらなくても、心配してくれている人がいるということを体験できる、経験できるということが、非常に大切なことではないだろうかな思う。
・学校が改善していく過程の中で、校長先生に何に一番努力されたかと聞くと、「わかる授業をしよう」ということをみんなで共通理解したとどこの学校も言う。まずわかる授業。ほかにもいろいろ要素はあるが、学校の中核は授業なのでわかる授業をやる。それは一番のポイントとして努力されているのではないかと思う。
・地域の方に学校に入っていただくということは、核になる方、力になる方がいたら、勉強を教えるだけでなく~~こ~~人生についてなど、いろんな話をしていただく中で、子供たちの大人に対する信頼感というのがだんだんとできてきている。それが町の中で生きていこう、つながっていこうという気持ちや、問題行動についてもブレーキとなってくると思う。
・警察に入っていただいているが、すごく上手に対応してくださる。本当ならば怒るだろうという立場の方が子供に寄り添って、それでも社会のルールはこうだよと指導してくださる。すばらしい才能で優秀な方々が学校の中に入ってくださるというのは、本当にありがたい。子供たちも好いている。学校の状況に合わせて動いてくださるというのが大きな力になっている。
・来ていただいた当初は、地域の方とか、また保護者からも学校に警察が入って、などという話もあったが、だんだん地域の方々にも浸透した。我々教員も情に訴えたり、多方面から子供たちにいろいろ話をしていくが、警察が言った方が一発で入る子もいる。我々と違う立場なので、子供だけじゃなく、保護者の方にもかかわりを持ってくださるので、是非とも続けていただけたらと思う。
・地域のお年寄りたちは、その子供のお父さん、お母さんのこともよく知っている。だから、不登校の保護者の方に話をしてくださることもできる。教員は数年おきに変わるので、

知らないことも多くあるが、地域の人から聞いて、つじつまが合うということもある。学校へ来ていただいて子供に対応するというだけではなく、保護者の話も聞かせていただいたり、地域での話を聞かせていただける。それは非常に役立つ情報であり、場合によっては直接応援してくださる方もあるのでありがたい、大切にしていきたいと思っている。